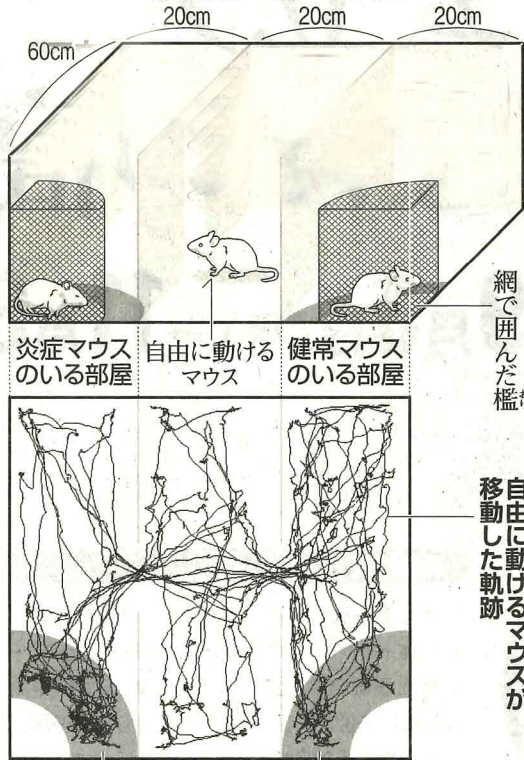


# マウスに「共感」能力

マウスの「共感」を調べる実験と結果



「近寄った」と判定するエリア

判定エリアに滞在した時間	炎症マウス	3分4秒
	健常マウス	2分13秒

## 川崎医療福大など実証

マウスにも苦しむ仲間を気遣い、寄り添う能力があるようだ。川崎医療福祉大などの研究グループが、高度な社会的行動である「共感的な行動」を示すことを明らかにした。「共感」は、人間では脳の病気や障害で損なわれることがある。研究グループは「共感の仕組みを、マウスの実験で追究する手法になりうる」と期待している。

共感とは、他者の感情や心の状態を自分のことのように感じる能力。高度な認知機能であり、マウスでは確認されていなかった。川崎医療福祉大の上野浩

司講師(神経生理学)と川崎大精神科学教室、岡山大精神神経病態学教室の共同研究チームは、マウスが、けがや意識不明という異常状態に陥った仲間マウス

スに対し、どのように振る舞うかを検証した。縦横60センチの大きなケージを透明な仕切り板で3等分した部屋を用意。仕切り板にはマウスが通り抜けられる穴が開いている。両端の部屋の隅の小さな檻に、異常状態のマウスと健常なマウスをそれぞれ閉じ込め、ケージ全体を自由に歩き回れるマウスが、檻の中を各マウスにどれだけ近寄るかを10分間調べた。その結果、後ろ脚に腫れを起こさせたマウスの部屋には平均4分37秒滞在し、

## 苦しむ仲間へ寄り添う

うち3分4秒間は20センチ以内に近寄っていた。一方、健常マウスの部屋の滞在時間は3分51秒で、近寄ったのは2分13秒とどちらも短く、統計学的に偶然とは言えない差が出た。ただ個体差があり、行動を確かめたマウス11匹のうち3匹は、寄り添う行動を見せなかった。一方、麻酔で意識を失ったマウス、尻尾を洗濯ばさみで挟まれ、痛みと怒りを生じているマウスに対しては、寄り添う行動は見られなかった。

上野さんは「痛がっている仲間を見ると、危険を感じ、避けるかと思っていたが、逆の結果になった。仲間の苦しみを感知して近づくと『共感様行動』をマウスで実験出来るようになれば、共感をつかさどる神経回路の解明や、共感を失った脳の病気の治療法の開発につながるでしょう」と話す。

成果は米科学誌「ブレイン・アンド・ビヘイビア」に掲載された。

(中村通子)